二つの世界

シロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二つの世界

【Ｎコード】
Ｎ６０４８Ｙ

【作者名】
シロ

【あらすじ】
主人公は何かに導かれるように大きな扉に入った。その扉は異世界へとつながっていた。主人公は異世界での生活の中でさまざまなことに気付き、考えながらも進んでいきます。基本的にファンタジーですので、そこを考えて見てください。

プロローグ（読んでくれるとありがたい、）

二つの世界はつながっている――――――――――

限りなく近い世界、だがそれでいて限りなく遠い世界でもある。

不思議な世界。

二つの世界は互いに異世界と呼べるほど文化の違いもある・・・・・

つながっている――――――――――――――――

何回も繰り返しに見る夢。
声が聞こえる。
何も見えず、声だけが聞こえてくる。
まるで神様が自分に何かをお告げするかのように・・・

ある日、突然あの『声』が聞こえるようになり、
導かれるように毎日同じ場所に来ている。
そこは古びて使われなくなった教会。
中は誰にも使われていなく何もない。
何もないそこでいつも同じことをしている俺。
自分の意識とは、関係なくつい何かを探してしまう。
その探しているものも知らずに――――――――

その日は、いつもとは違った。
中に入ると俺の体は探し物を見つけたように、動いていた。

大きな扉。それを見つけたからだ。
無意識に俺はその中に入った。

世界は変わっていく・・・・・これから、

新世界（前書き）

＊主人公データ＊
名前：坂本海斗（さかもとかいと）
年齢：１６歳
身長：１６５ｃｍ
体重：５０ｋｇ
外見：黒髪、肌は日本人独特の色、服装は流行りのもの

新世界

ある日、導かれるように門を見つけ門の中に入ると異世界にいた。この世界が元の世界と違うと気付いたのは、何もあんな不思議な門を通ってきたからだけじゃなくて、周りの風景、植物、動物が違う。これは驚いた。地球の植物、動物を少し変化させた物が存在していたからだ。

そんな考えを張り巡らせていた時、誰かが近づいてくる気配を感じた。俺は様々な不安を感じた。まず第一に言葉が通じるかどうかだ。その次にこれからどうするかだ。とりあえずは、言葉が通じなければ何もできない。そんな不安など知る由もなく、その人物は話しかけてきた。

「＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊？」

何かを問いかけているようだが、何を言っているのかが分からんので返事をしなかった。

「＊＊＊・・・＊＊＊＊＊＊、、」

名前などは知らないのでこの男のことは、Ａとしよう。Ａは何かを考え込んで静かになった。

ついてこいとでも言うように手招きをしている。俺は大人しくついていき、そのＡがジェスチャーしている家に入った。

中にいたのは１人の老人。Ａは老人に何か話しかけると、その老人は何かを地面に書きさらに何かを呪文のように唱えている。唱え終わると、俺にＡが声をかけてきた。

「聞こえるだろ？お前、」

突然何を言っているのかが分かり驚いた。だが、何より先に言っておかなければならないのは、

「俺の名前は坂本海斗だ！！！」

「あ～それは悪かった。カイト、

それより重要なのはお前違う世界から来たのか？」

なぜそういう発想になるのかは、分からなかった。ただあの場所にいただけの人間にこんなこというか普通？
「俺は、確かに異世界からきたがなぜそう思う？」
「なぜなら、ここは獣族の国だからな、お前のような人間がここへこれるはずがないだ。」
「色々疑問はあるがそれは後回しにして、どうして人間は来れないんだ？」
「話すと長くなるが・・・・・・

話したことをまとめると、
この世界は３つの大陸と３つの種族そしてその種族の中でも１０以上の種類があるらしい。
国同士は仲が悪く３つの国は対立している。
大陸と大陸の間の海は広く巨大な船でしか来ることはできない。そんなものが来れば、すぐ見つかって船ごと破壊されてしまうらしい。ただ例外もあるらしい、それが魔法。魔法なら誰にも気づかれずに国に侵入できる。だが、それは人間達の国だけだ。人間達は魔法が使えず結界を張っていないから、楽に侵入できるらしい。他の２つの国に侵入する方法は、異世界人がもつ魔法だけだ。異世界人の魔法は特別らしく、昔来た異世界人もそれで驚くべきことをしたと歴史の本に書いてあるらしい。異世界人の魔法の中の『ゲート』扉を開き、自分の望んだ場所に行けるすごい魔法らしい。他のことは今度話すと言われた。今度とは、いつだろうか？この世界についてたくさんの情報を仕入れておきたい。たくさんの事を知りたい。そうしないとこの世界が危ないかが見極められないから・・・・・

「そういえば、お前、名前を教えてくれないか？」
「俺の名前はウルフェリン・ボーグ。ウルフって呼んでくれ。」

ウルフ。

これが俺の出会った初めての仲間だった。

仲間との出会い（前書き）

人物紹介
名前：ウルフェリン・ボーグ
年齢：２９歳
身長：１８０？
体重：６７？
種族：獣ー犬族
外見：髪型は短髪、黒？少し茶髪？そんな色。体格は、がっちりしていて筋肉質。服装は動きやすい服装で帽子をよくかぶる。
好きなもの：かわいいもの、自分より弱いもの、甘いもの、面白いもの、等々
嫌いなもの：人を見下す奴、野菜全般、機械、等々
このキャラは強い印象を与えるため男も女も好きなバイ（両性愛者）にして見ました。どちらかというと男の方が好きです。４対６で男です。

仲間との出会い

よく考えると、おかしなことだらけだった。
このウルフはどうやら獣族のようだ。気付かなかったが、帽子の下から犬耳が出てきていた。それだけでなく、尻尾までも出てきて驚いた。
コイツは獣族でここは獣の国か、どうせなら人間のいる国からにしてほしかったものだ。そこからなら安全だし、俺自体人間なのだから、しばらくそこで情報収集やらできるであろう。そうだ、俺には異世界人特有の魔法『ゲート』があるはず、それを使えば・・・
「考え事か、そうだなこれからどうするか、まずはそれだな・・・」
だから俺もこうして考えている。とりあえず魔法を使って人間の国まで行って、そこで情報収集だ。そのためには、魔法の使い方を知らなければ、、ちょうどここには、魔法使いらしき老人がいる。この人にならってすぐここから立ち去ろう。
「あの、おじいさん。俺にゲートの魔法の使い方を教えてくれませんか？」
そこで初めて老人を見た。その老人は、耳がとんがっていて、そうエルフのようだった。
「そうだな・・・ゲートは世界を変動させる力を持つ、安易に教えることはできない。残念だが、教えることはできない。」
駄目か。別にここでなくてもこんな世界だ。魔法の使える奴なんてごろごろいるだろう。
「他の魔術師とかそういう奴って何処にいるんだ？」
「魔術師などそうそういるものではない。魔法を使えるものなど私たち天上人の弟子たちエルフ達か、古代からの魔法使いの血筋のものだけだ。だから人間の中には魔術師とかがいないんだ。」
「その話はおかしい。別に人間の中には古代からの血筋のものがいてもおかしくないだろ？それに、エルフ達だってどこにだっている

んじゃないのか？」
聞きたいことはたくさんある。今聞けることは今聞くだけだ！！
「それはな・・・今の人間の国を見れば分かるように、人間は機械に頼り、自然や動物たちを忘れてしまっているからだ。魔法は自然の力。科学の力と自然の力は、対極なんだ。だから魔法そのものの必要性を人間たちは感じていないし、そんなところにエルフ達はいかない。それが人間たちが魔法を使えない理由だ。」

「それもまた可笑しな話だな。魔法で人間の国は侵入されたりしているかもしれないのに、」
「ここからは、少し長くなるが・・・・・・

この世界は複雑な事情らしい。まず魔法を使える奴については今はこの老人以外探すのは、困難らしい。それにゲートでは、俺の元いた世界までは戻れないらしい。他にも色んな事を聞いたが、それはまたその時が来てからにしよう。結局、ウルフに聞くまでもなく色んなことが分かった。それに、コソッと教えてもらった話だが、犬族は昔、人間に仕えていたらしい。その時に犬族は忠誠心を示すため後世の子孫たちへの魔法『Ｐｒｏｏｆ　ｏｆ　Ｌｏｙａｌｔｙ（忠誠の証）』を使い後世までその影響を残したらしい。その影響が、人間には絶対逆らえず、攻撃はもちろん、そういう類のことができない。

俺は、何気なくウルフ・・・やっぱり言いにくい。ウルフって名字だよな。なら名前でボーグでいいか、ボーグは俺のことをどう思っているのだろうか？あまり心中いい気分ではないようだが・・・・
「大体話は聞いただろう。これでこの世界の事は大体分かったはずだ。それよりこれからどうするか決めろ。」
確かにどうするか、、難しいところだ。やっぱり、一人は心細い。

仲間が欲しいところだ。俺の目的は、天上人の持つ魔法『Ｒｅｔｕｒｎ（帰還）』を覚えて帰るために、　天上人を探す旅に・・・
「その・・じいさん。天上人っていうのは何処にいるんだ？」
「天上人は、普通に地上にいるものではない。３つの国の王の持つカギ・・・その３つが合わさった＜神祈の綱＞でしか天上人に会う手段はない。その綱を特別な場所で使うと、天上人のところまで行ける。」
「なら、簡単だな、王様に会って、カギをもらって天上人に会って帰るだけだ・・・・・っ」
あれ、視界が揺らぎ、頭がボーとする。この感じ、嫌な感じだ、俺はバランスを崩し倒れた。と思ったが、倒れていなかった。
近くにいた、犬の男に助けられた。
「だいじょうぶか？気分が悪いのか？」
やっぱり今でも人間への忠誠は続いているのか、、
「ダイジョ、、、ブ・・・」
その後のことは覚えていない。たぶん気絶したのだろう。

ｓｉｄｅ：ウルフ
俺は正直、今でもあの呪いが続いているとは思わない。確かに人間を攻撃したりできないし、困っていたら助けてしまう、それが敵地への侵攻の途中だとしても・・・
だが、それはすべて俺が優しくて、（自分で言うのも何だが、）自分より弱くかわいい種族が気に入ってそんなことができない。そうこれは俺の意志だ。
　だから、倒れようとしていた少年を助けた。弱っている奴は見ていられない。
　俺には特殊な能力があった、その能力は相手の表面上の感情を読

むこと。対象に触れている間だけだが、　それでコイツに触れたときに分かった。コイツは純粋で、優しい。コイツなら・・・もしかすると・・・・3人の王たちを――――――――――
とりあえずお前なら俺が協力してやろう。お前は俺の好みのタイプだしな、、

仲間との出会い（後書き）

なんかあったらコメントくださいm（_ _）m

新たな街（前書き）

＊種族紹介＊

鳥獣族：鳥のようだが知性は高い。羽が生えており空を飛ぶことができる。（人間とのハーフの場合外見、中身とも人間のようだが、羽は体内に隠れており自在に羽を出すことができる）

鳥獣族は数が多いけど、ハーフは中々いないらしい、

新たな街

・・・・・・・・・　意識が戻ると周りの風景は動いていて、何かの乗り物に乗っていることが分かった。この乗り物は、人力車か。人力車など古風な乗り物がまだあるのかこの世界は、、この世界の文化水準は低いようだ。それより誰が俺を運んでくれて、何処へ連れて行く気なんだ。

しっかり目を開き、まだ寝ていたい衝動を抑え、俺はその人物を見た。

「おはよ～う」

「んっんぅ～～」

背の伸びをして状況を確認するため目の前の男に話を聞く。

「それよりこれはどうしたんだ？どういうことなんだ？状況は？」

「そんなに一度に同じようなことを聞くな！！」

ガツン　と頭を殴られた。

「痛っぃ、、、」

「あっ痛かったか？ごめんな、、」

殴った部分に手をあて、「痛くないか？」とか「大丈夫か」とか聞いてきて、優しいと思えることがある。こういう奴は嫌いじゃない。むしろ好きだ。まぁもしも俺が女だったらコイツと付き合っていいかな、と思える奴だ。そんなことはありえないことだからどうでもいいが・・・

「・・・・ふーんそうかそうかー」

何かを理解したように俺の顔を見る。怖いぞお前・・・・

「それより俺の質問に答えろ！！」

「あー分かったよ。」

説明を聞くと、要するに俺が倒れて、そしてコイツが俺をこの安い作り乗り物に乗せて、王様のいるとこまで向かっているらしい。
クソッもう少しあそこで勉強したかったのに、、魔法について、、、
「あ～そういえば何処まで付いてくるんだ。ウルフは？」
「ウルでいいよ。俺はお前がこの世界を離れるまでいっしょに旅をするが、、問題でもあるのか？」
　お前がウルフって呼んでくれっていったんだろというツッコミは置いといて・・・・
「ないよ。ただお前は、何でそこまでしてくれるのかなって思って。」
もしも俺の考えが当たっているなら、もう帰ってほしい。そんな自分の意志も関係なく、運命とかに巻き込まれて俺に付いてくるのはやめてほしいと思ったからだ。
「俺は俺がしたいと思ったことをやる。それだけだ・・・・」
本当にそうなのかは分からないけど、今はそれで納得しようと思った。

「さて、色々聞いてもうお前も大分分かってきただろ、それじゃ改めて自分たちのことを話さないか？」確かに使える魔法。得意なこと、苦手なことなど後で知ったのでは遅い。こういうのは、早めに知っておきたい。
「俺は坂本海斗、１６歳。異世界から来た、一応異世界の魔法は使える・・・はず、、」
「おいっ自信なさすぎだろ、、」
「一回なんか使ってみろよ」

そんなこと言われても・・・・何かないか？んっこの世界に来る前と違うものが俺のポケットに入っていた。紙を広げると何かが書いてあった。記号と呪文？みたいなものが、もしかしてあの老人がくれたものかな、

「さて、そんな冗談はさておき・・・俺の自己紹介をしようか。名前はいいよな別に、、歳は２９歳。好きなものは、かわいいもの全般。嫌いなものは、かわいくないものかな？」

どうでもいい情報が手に入り、俺はコイツに話を聞くのが無駄だと思った。

「あと、俺は男も好きだ。お前がよかったら俺と「あーー魔法の準備が整いました。」

さて、無駄な話の合間、魔法の準備をしていた俺は危険な発言をしようとしていた言葉をさえぎり魔法を使った。魔法の使い方は紙に書いてあった。だが、文字が読めなかったから記号みたいなのを腕に書いて、呪文のアルファベットを読んでみることにした。老人の見よう見まねだ。何の魔法かも知らないまま、

「Ｔｅｌｅｐｏｒｔ（瞬間移動）」腕に書いた記号みたいなのが光だし、

俺たちはその場から消えた。

新たな街（後書き）

どの呼び方がいいのでしょう？ウル、ボーグ、ウルフ、どれにしましょう？コメントよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6048y/

二つの世界

2011年11月20日19時30分発行